

九州在住の能楽師による能・狂言を みてみませんか？

公益社団法人能楽協会九州支部は、
平成十一年に設立されました。

現在、シテ方四流、ワキ方、囃子方七流、狂言方二流、
約七十名の能楽師が所属しています。

本年は、二十回を記念致しまして、
能二番と狂言、舞囃子、仕舞と各流の競演をお楽しみください。

◆ 予告

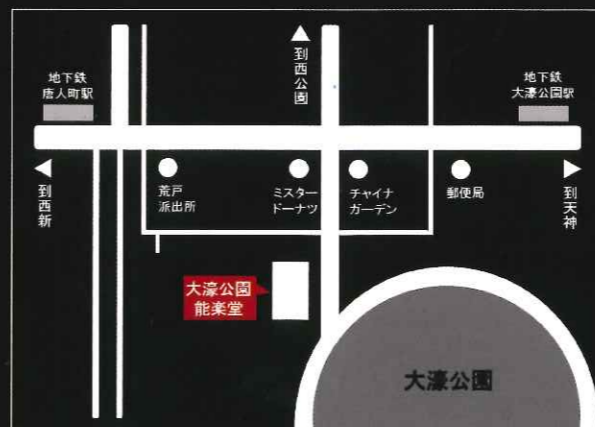
クリスマス能

令和元年12月22日(日) 大濠公園能楽堂

能 田村替装束 久保誠一郎
他 狂言、舞囃子、仕舞

大濠公園能楽堂

福岡市中央区大濠公園1-5 ☎092-715-2155



大濠公園能楽堂までのアクセス

- ・地下鉄大濠公園駅または唐人町駅から徒歩7分
- ・西鉄バス大濠公園バス停または黒門バス停から徒歩3分

主催/公益社団法人能楽協会九州支部

後援/福岡県、福岡県教育委員会、福岡市

【入場料 (全席自由)】

一般 6,000円 (当日7,000円)
学生 3,000円 (当日3,500円)

【入場券販売所】

- 大濠公園能楽堂
福岡市中央区大濠公園1-5 ☎092-715-2155
- チケットぴあ
0570-02-9999 【Pコード 494-952】
(セブンイレブン、サークルK、サンクスでもご購入できます)
- ローソンチケット
0570-084-008 【Lコード 83598】
(ローソン、ミニストップのLoppiでもご購入できます)

公益社団法人能楽協会九州支部

第二十回記念

ほおずき能

舞囃子

岩

船

粟谷

充雄

能

千

手

今村

嘉伸
嘉太郎

舞囃子

鶴

亀

東川

光夫

狂言

末広かり

野村

万禄

能

大瓶猩々

今村

宮子

令和元年八月二十五日(日) 十二時三〇分始

(午前十一時三〇分開場)

大濠公園能楽堂



第二十回記念 ほおずき能

令和元年八月二十五日(日) 十二時三〇分始

大濠公園能楽堂

【解説】

舞囃子(喜多流)

岩船

栗谷 充雄 大鼓 白坂 信行 太鼓 田中 達
小鼓 飯田 清一 笛 出雲 敏弘

地謡 狩野 了一 渡辺 康喜
大島 輝久

能(観世流)

狂言(和泉流)

末広かり

果報者 野村 万禄 太郎冠者 吉住 講
すっぱ 吉良 博靖

後見 近藤 信一

〔休憩 十五分〕

能(観世流)

千手

重衡 今村 嘉伸
千手 今村嘉太郎

宗茂 坂苗 融 大鼓 白坂 保行
小鼓 飯富 章宏 笛 相原 一彦

後見 山口剛一郎
坂口 信男

地謡 川副 憲一 鷹尾 章弘
久保誠一郎 鷹尾 維教
今村 一夫 森本 哲郎

〔休憩 十五分〕

仕舞(金春流)

嵐山

田中 寿男 地謡 北山 春彦
櫻間 右陣 東 軍三

仕舞(喜多流)

草紙洗小町

狩野 了一 地謡 渡辺 康喜
粟谷 充雄 大島 輝久

仕舞(観世流)

高田村砂

久保誠一郎 井内 政徳
鷹尾 維教 今村 一夫
坂口 信男 地謡 多久島利之
森本 哲郎 山口剛一郎

舞囃子(宝生流)

鶴亀

東川 光夫 大鼓 白坂 保行 太鼓 田中 達
小鼓 飯田 清一 笛 浦 政徳

地謡 久貫 弘能 田村 恭 山岡 晴美 三澤 栄子

終了 4時50分頃

大瓶狸々

高風 御厨 誠吾 大鼓 白坂 信行 太鼓 吉谷 潔
小鼓 幸 正佳 笛 森田 徳和

末社の神 茂山 忠三郎

後見 森本 哲郎
今村 嘉伸

地謡 井内 政徳 久保誠一郎
今村嘉太郎 鷹尾 章弘
山口剛一郎 今村 一夫

◆あらすじ

能 千手(せんじゆ)

源平の戦で捕虜となつて鎌倉に護送され狩野介宗茂に預けられている平重衡に、源頼朝は、手越の宿の長の娘 千手前を遣わして慰める。

雨の降る夜、千手は琵琶、琴を持ち現れ、宗茂も重衡に酒を勧める。千手と重衡は、朗詠や今様を謡い、舞を舞い夜を明かす。

やがて重衡は再び都へ送られる事となり、二人は名残を惜しみながら別れる。

狂言 末広かり(すえひろがり)

ある果報者が、祝宴の進物用に末広かり(扇の一種)を買うために太郎冠者を都へ使わす。末広かりが何であるかを知らない太郎冠者が「末広かり買おう」と呼び歩いていると、すっぱ(詐欺師)に呼び止められる。すっぱは言葉巧みに太郎冠者をだまし、傘を末広かりと偽って売りつける。高い値で傘を持ち帰った太郎冠者ですが、さて結末は……!

能 大瓶狸々(たいへいしやうじやう)

唐土(中国)の揚子の里に高風という親孝行な酒売りがいた。そこへいつも大勢の童子が酒を飲みに来るので、ある日その素性を探ねようと待っていると、一人の童子が来て、美味しそうに酒を飲み、自分は浸陽江に住んでいる狸々と名乗り、親孝行な高風に泉の壺を与えようと思つていと言ひ、立ち去った。その夜、浸陽江に数多の狸々が現れ、秋の美しい月光の下に大瓶の酒を飲み、舞ったりしていたが、その泉の壺を高風に与え、御代萬歳と謡いながら帰り去るのであった。